

住めば都

エルサルバドルに住んで早、40年余が過ぎた。背を振り返れば「あっ」という間であると同時に第二の故郷とも思える。この国は、日本の四国程（約2万1千㎡）の大きさしかなく、人口（約630万）も多く、貧富の差も非常に大きい。

内戦前（70年前半）は中米の日本とまで言われ、人々は働き者であった。国は平穏で天国のようであった。内戦中（75年～90年）国外に移住する人々（特に米国に250万人余り）が増え、農業人口が極端に減少した。ある農村では、老人、子供しかいなく、移住した若者の仕送り（年間総額350万ドルで一人当たり月300ドル程度）で生活をしているという状況であり、消費社会を形成しつつある。内戦後（90年以降）は、犯罪者、不良等の人々が強制送還され、いくつかの不良グループを構成し、一般市民を脅かしているが、外国人に対しての被害はほとんどないようである。



コアテペケ湖 写真提供：柴田潮音氏

しかし、この様な国でも良いところはある。海、山、湖等に行くにもほんの30分余りで行ける。なんと便利なことではないか。レストランにしても、日本料理、中国、インド、ベトナム、アラブ、スペイン、イタリア、ギリシャ等で好きなものを美味しく食べられる。また、日本では考えられない事だが、この国の中産階級（自家用車を持ち、月の収入が2千ドル程度の人々、人口の約7%程度）であれば、結構楽しく、優雅な生活ができるのである。

ともあれ、どこの国でも住めば都である。

山岸



チャルチュアバ市 写真提供：柴田潮音氏

山岸敏男氏

1972～74年に青年海外協力隊バスケットボール隊員として活躍後、1977年7月、エルサルバドル国際空港建設のために（株）東芝の社員として再来、無線や滑走路照明の建設に携わった。現在は現役を引退し、悠々自適に毎日の生活を満喫している。